館林キリスト教会
デボーションノート（2026 年）

４月１日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１０章４６～５２
「バルテマイ」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU104.mp3
イエス様と弟子たちはエリコにやってきました。エルサレムの都はもうすぐです。イエス様は何日かのちには十字架で死なれたのです。このとき、十字架の死の直前、という緊張感が弟子たちにもあったのです。群衆はイエス様を取り巻いていました。いつものように道端で物ごいをしていた盲目の人が、群衆の急ぎ行く足音に、何事かと尋ねますと、ナザレのイエスがお通りなのだ、と知らされました。彼は大声でイエス様をお呼びしました。多くの人々がしかって黙らせようとすると、なんとますます激しく叫び続けました。イエス様は彼に「わたしに何をしてほしいのか」と敢えてお尋ねになり、願いと信仰を確認なさったのですが、実は、彼がイエス様への信仰を確認する機会を与えてくださったのです。癒されて、バルテマイが目にしたのは、十字架を目前にした、しかし慈しみに満ちたイエス様のみ顔だったでしょう。

４月２日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１１章１～１４
「エルサレム入城」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU111.mp3
イエス様は十字架を目前にして、エルサレムの都に入城なさろうとしていました。オリブ山沿いを進み都にさしかかると、弟子たちに、近くの村に行ってろばを連れて来なさい、とおっしゃいました。しかもまだだれも乗ったことのない子ろばを。イエス様は旧約聖書に長い間預言されてきた、神の御子、救い主に関するみ言葉のとおりに入城なさったのです。まさにこの出来事は聖書のみ言葉の成就でした。小さな国土のユダヤは、長い歴史において、南北の大国の脅威にさらされ続け、戦いで苦しみを味わってきました。エルサレムに入城なさったイエス様は、軍馬ではなく、人々の日常で親しみ深いろばにお乗りになりました。イエス様こそ平和の王なのです。私たちが、平和の王であるイエス様を信じて心にお迎えするなら、主にある平和が与えられ、広がってゆくのです。

４月３日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１１章１５～２６
「宮きよめ」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU112.mp3
イエス様は宮に入られると、そこで商売をしている人や、不正を働いている人を見て、激しく怒り、「『わたしの家は、すべての国民の祈りの家ととなえらるべきである』と書いてあるではないか。それだのに、あなた方は強盗の巣にしてしまった」と言われました。祭司たちは犠牲のための動物を法外な値段で売

ったり、不正な両替をしたりしていたからです。その翌朝、弟子たちは、イエス様が呪われたあのいちじくの木が、枯れているのに気がつきました。イエス様は、山も動かすことが出来る、という祈りの力を教えるために、いちじくの木を枯らさせたのです。そして祈りに大切なのは、他の人に対する恨みを心の中に持っていてはならないことです。神様がキリストによって、私たちを赦してくださったように、私たちも自分に対して罪を犯す人々を赦す必要があるからです。

４月４日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１１章２７～３３
「何の権威によって」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU113.mp3
イエス様はエルサレムに入ってから、毎日のようにソロモンの廊で教えていた。すると、祭司長、律法学者、長老たちが、イエス様のところに来て「何の権威によってこれらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか」(28 節)と詰問してきた。それはイエス様が神殿をきよめるために両替人や鳩を売る商人たちを追い出したからだ。この時彼らは、「どうにかしてイエスを殺そうと計った」(18 節)とある。ですからこの権威の論争には殺意が伺える。しかしイエス様は「ヨハネのバプテスマは天からであったか、人からであったか、答えなさい」。と返答不可能な問いを逆に突きつけ、これをかわされた。

４月５日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１２章１～１２
「最後に息子を」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU121.mp3
祭司長、律法学者、長老たちがイエス様に、何の権威によって宮清めをしたのか問いただしました。このやり取りのあと、イエス様はひとつの譬をお話になりました。ある人がぶどう園を農夫たちに貸して旅に出ました。収穫時期に、主人はひとりの僕を送って収穫の分け前を取り立てさせましたが、袋だたきにして、から手で帰らせました。三回目には僕を殺してしまいました。主人は大勢の人々を送りましたが打ったり殺したので、最後に愛する息子を送ったのです。しかし、農夫たちは息子をも殺してしまったというのです。旧約時代の預言者たちの言葉に背を向け迫害し、父なる神様が送ってくださった救い主イエス様を、彼らは、いよいよ捕らえようとしたのです。しかし群衆を恐れてしかたなく立ち去りました。

４月６日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１２章１３～１７
「ジレンマ」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU122.mp3
祭司長たちはイエス様逮捕の口実をつかもうと今度は、パリサイ人やヘロデ党の者たちをつかわしました。彼らはローマ政府に納税することは正しいのか、と質問しました。当時成人一人１デナリの人頭税納付義務がありました。パリサイ人は選民イスラエルが異邦人に納税するのは反対の立場、ヘロデ党はヘロ

デ王家再興のため、ローマ政府よりの立場でした。イエス様を陥れるため、両立場の人々をつかわしたのです。イエス様はデナリ銀貨に刻まれた皇帝の肖像を示し、果たすべき義務を果たすように、同時に、神様に命をいただき生かされている人間として、神様に感謝し信じ従うべきことも明らかにしてくださいました。彼らはイエス様の言葉に驚嘆しましたが、なお心を閉ざしたままでした。

４月７日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１２章１８～２７
「復活論争」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU123.mp3
ここは、エルサレムでの三つの論争の最後で、復活を巡っての論争である。サドカイ派の人々は復活はないと主張していた（18 節）。彼らは旧約聖書の中でも特にモーセの五書（創世記から申命記まで）を大切にし、復活を信じていなかった。そこで、イエス様が教えている復活の誤りを指摘してやろうと論争をしかけてきたのである。「７人の兄弟が次々と結婚したが、……７人ともみな子孫を残さず死に、最後に彼らの妻となった女も死んだ。復活のとき、彼らが皆よみがえった場合、この女はだれの妻なのでしょうか」（20～23 節）という質問だ。イエス様はこの質問に対して、天国における有様は、この世の関係の延長であるように考えるのは誤りで、「あなたがたがそんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからだ」と論破した。

４月８日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１２章２８～３７
「愛の戒め」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU124.mp3
ある律法学者が、人々が互いに論じ合っている中で、イエス様が巧みに答えられるのを認め、「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」と質問してきた。この質問に対して、イエス様は旧約聖書から二つのいましめを引用して答えた。イエス様はまず、申命記６章４，５節を引用して、「神を愛せよ」ということが最も大事ないましめでであると答えた。申命記６章４節は「シェマ、イスラエル」（イスラエルよ聞け、という意味）で始まる。イスラエルの人々はこの言葉を暗記し、生活の基礎としている。次に、レビ記１９章１８節を引用して、隣人愛のいましめをお示しになった。神を愛することと、隣り人を愛することは、順序を逆にすることは出来ないが、車の両輪のように、切り離すことが出来ない関係にあるといえる。

４月９日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１２章３８～４４
「レプタ二つの献金」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU125.mp3
イエス様は、本来人々を導くはずの律法学者が注目と尊敬を集めようとする誤った姿を指摘なさいました。さて、イエス様は神殿の内庭で献金箱に向かってお座りになっていました。立派な服装をした裕福そうな人々が次々に気前よく大金を投げ入れていました。そこへひとりの貧しい未亡人がやって来ました。

そしてレプタ銅貨二つを投げ入れました。これは１コドラントで、一日の労賃とされる１デナリの６４分の１に相当しました。イエス様は弟子たちを呼んで、あの婦人はだれよりもはるかに多く投げ入れたこと、ほかの人はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人は乏しい中から、その生活費全部を投げ入れたのだ、とおっしゃいました。彼女の心に満ちていたのは主への感謝と信仰で、喜びに溢れたささげものだったからでしょう。

４月１０日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１３章１～１３
「終末の前兆」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU131.mp3
イエス様は、日曜日にエルサレム入城なさり、祭司長たちから次々と質問を受けたのです。１１章２０節から１３章は「論争の火曜日」といわれ、この箇所も含まれます。二日後の木曜日には最後の晩餐、翌日には十字架でお死にになりました。さてイエス様は東のオリブ山から神殿をご覧になりながら終末の前兆について話されました。イエス様を名乗り「自分こそそれだ」と言う人々が現れること、戦争と戦争のうわさを聞いてもあわててはいけないこと、地震、飢饉等の自然災害、しかしこれは産みの苦しみで、信じる者には苦しみの後、喜びの時がくること、弟子への迫害。証しと福音宣教。信仰を持って最後まで耐え忍ぶ大切さを教えて下さいました。

４月１１日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１３章１４～２３
「終末の大患難」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU132.mp3
「荒らす憎むべきもの」が、自分の立ってはならない所に立ったならば、それは大患難として知られている最後の恐るべき地上のさばきの時が到来した、という告げ知らせです。この出来事はダニエル書 9 章 27、11 章 31、12 章 11 の中に示されています。この預言は、まずシリア、セレウコス朝のアンティオコス・エピファネスが、ユダヤでは不浄の動物であった豚を神殿の聖所に犠牲としてささげたことによって成就しました。二度目の成就は、ローマ軍がＡＤ70 年にエルサレムを占領した時です。ユダヤ人のクリスチャンたちはこの警告を覚えていて、これに従い安全に逃れたと言います。そして、三度目（最後）の成就は、キリストの再臨の到来の告知として、苦しみとさばきの時に先立つ、反キリストの現われの時に起こります。

４月１２日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１３章２４～３７
「終末の日の到来」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU133.mp3
やがて終末の時がやって来ます。その日には、地上の苦難や迫害に続いて天地に異変が起こり、そしてキリストが再臨されます。私たちは、「いちじくの枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏が近い」（28 節）とわかるように、毎日の新聞、テレビを見ても、終末に向けて秒読みが始まった時代に生きていることを強く感じます。私たちは主の十字架と復活を信じているのと同様に、主の再臨を信じています。主が私たちの罪のために死んで、義とするために復活

されたように、栄光の中に私たちを迎えるために再びおいでになるのです。けれども、キリストが来られる時期については、神様だけが知っておられます。ですから私たちは主から任されたことを励みつつ、再臨の備えをするのです。

４月１３日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１４章１～１１
「ナルドの香油」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU141.mp3
３節は「重い皮膚病の人シモン」と読み替えてください。過越の祭が二日後に迫りました。この祭にはイースト菌を入れずに焼いたパンを食べます。発酵させる間もなく忙しくエジプトを脱出したことを記念し、主の恵みを感謝して毎年守られてきました。祭司長や律法学者たちはイエス様を殺そうとしていましたが、ユダヤ人が各地から集まる過越の祭では民衆の騒ぎを警戒していました。シモンの病気は完治していたのでしょう。イエス様も食事に招かれた席でのことでした。ある女の人が非常に高価で純粋なナルドの香油をイエス様の頭に注ぎ信仰による感謝を表しました。３００デナリとは３００日分の労賃です。これは十字架を目前にしたイエス様の葬りの備えとなりました。信仰によって時を逸しなかった彼女の奉仕は主の十字架と復活とともに語られ続けています。

４月１４日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１４章１２～２５
「契約の血」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU142.mp3
過越の祭の最初の日、弟子たちはイエス様に過越の食事の用意をどこでしたらいいでしょうか、と尋ねました。イエス様は二人の弟子を使いに出しました。この二人はペテロとヨハネでした。イエス様は、水がめを持っている男に出会うのでついて行き、その人が入って行く家の主人が二階の広間を見せてくれます、というお言葉のとおりでした。彼らは過越の食事の準備をしました。主イエス様は十字架の前夜、パンを取り「これはわたしのからだである」また杯を取り「これは多くの人のために流すわたしの契約の血である」と言われました。コリント人への第一の手紙１１章２５，２６節には「記念として、このように行いなさい。…主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである」とあります。十字架で裂かれたキリストのお体、流された血潮を記念して今も聖餐式が執り行われ続けています。

４月１５日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１４章２６～４２
「イエス様の祈り」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU143.mp3
イエス様は、オリーブ山に向かう途中で弟子たちに「あなたがたは、皆、わたしにつまずくであろう」と言われ、またゼカリヤ書 13 章 7 節を引用し「わたしは羊飼を打つ。そして、羊は散らされるであろう」と言われた。弟子たちが散り散りになることの予告だが、ペテロは、これを打ち消した。自信を持っていたからである。その時イエス様は、ペテロがもうすぐ自分を否定することを知っていたので、「あなたの信仰がなくならないようにあなたのために祈った」と諭された。何という深い愛だろう。続いてのゲッセマネの祈りは、祈りの真髄

といわれる箇所だ。私たちもイエス様に倣って、どんな時にも「みこころがなるようにしてください」と祈りたい。

４月１６日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１４章４３～５２
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU144.mp3

（解説はありません）

４月１７日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１４章５３～６５
「偽りの判断」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU145.mp3
５５節５６節には「イエスに不利な証拠を見つけようとしたが、得られなかった。多くの者がイエスに対して偽証を立てたが、その証言があわなかったからである。」とあります。５７節以降にも「ついに、ある人々が立ちあがり、イエスに対して偽証を立てて言った、…しかし、このような証言も互に合わなかった。」とあります。祭司長たちも、全議会も躍起になってイエス様に不利な証拠を見つけようとしましたが得られませんでした。大祭司はイエス様の「わたしがそれである。…」という言葉を「けがし言」と判断し「彼らは皆、イエスを死に当るものと断定した。」のです。イエス様は真理を証言なさったのです。事実、イエス様は父なる神様のひとり子、キリストであり、十字架と復活ののち、再び天の雲に乗っておいでになるお方です。

４月１８日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１４章６６～７２
「泣きつづけたペテロ」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU146.mp3
ペテロは、イエス様が気がかりで遠くからついて行きました。とうとう大祭司の中庭に入り込み、下役たちに混じって焚き火にあたっていました。イエス様の仲間のひとりだ、と言われると、ペテロは否定して、三度目には「あなた方の話しているその人のことは何も知らない」と言い張って、激しく誓いはじめた、のです。ガリラヤの漁師として家族を養ったペテロ。弟子の一人として召され、イエス様と三年にわたって歩んだペテロ。年長者でもあり弟子たちの筆頭として歩んだペテロ。彼が「その人のことは何も知らない」と激しく誓いはじめたのですから、イエス様の仲間だと知られるのを、どんなに恐れていたかよくわかります。捕らえられて処刑されるかもしれないと恐れたのでしょう。このペテロをなにもかも知っていてくださって、あらかじめお語りくださった主のみ言葉が心に響いて彼は「泣きつづけた」のです。

４月１９日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１５章１～２０
「総督ピラトの前での裁判」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU151.mp3
早朝の議会で決められた事項は、イエス様をローマ総督ピラトのもとへ送ることだった。送られたイエス様はピラトに対しても、自分が王であるとを言ったが、ピラトはイエス様が、王らしい風貌は何もなかったので、空想家位と思っ

たに違いない。そればかりかイエス様を訴えたのは、祭司長たちの妬みである事は重々承知していた。またピラトはイエス様が罪のないことを知っていたが、彼らの感情を害さないように、囚人バラバかイエス様のどちらかを赦す方法を彼らに提案した。すると群衆は驚いた事に、イエス様を「十字架につけろ」と叫んだのだ。箴言 14 章 30 節に文語訳で「妬みは骨の腐れなり」と記されている。妬みとは本当に恐ろしいものだ。

４月２０日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１５章２１～４１
「十字架上のイエス様」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU152.mp3
十字架につけられて殺されようとしているイエス様に対し、十字架の下ではローマ兵がイエス様の着物を誰が取るかでくじ引きをし、野次馬連中はイエス様をののしった。祭司長たちも品のない悪態をついていた。昼の１２時になると、不思議な暗闇が全地を覆い、しかもそれが三時間も続いた。その時「イエスは大声で、『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と叫ばれた。それは『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』」という意味である」（３４節）。イエス様のお苦しみがどんなであったか、私たちには理解する事など不可能だ。しかし、この言葉をかみしめていくと、神様の愛を見るような気がする。だからパウロが「言いつくせない賜物のゆえに、神に感謝する」（Ⅱコリント 9 章 15）と書いたのではないだろうか。

４月２１日　　今日の通読箇所マルコによる福音書　１５章４２～１６章８
「ここにはおられない」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU153.mp3
イエス様が十字架にかかってお死にになった日は、安息日の前日でした。夕方、アリマタヤのヨセフは、ローマ総督ポンテオピラトの所へ行き、イエス様のおからだの引き取り方を願い出ました。ピラトが「イエスがもはや死んでしまったのかと不審に思う」ほど、イエス様はすべての人の罪の身代わりに、極限の苦しみを受けてくださったのです。ピラトは、イエス様の死を百卒長からも確かめた上「死体をヨセフに渡した」のです。ヨセフたちは没薬と沈香を用いて亜麻布でおからだを巻き、岩を掘った横穴の、ヨセフの新しい墓に納めました。入口を大きな石でふさぎました。三日目の朝早くマグダラのマリヤたちが出かけてみると墓の石は取りのけられ、御使いがこう告げました。「ここにはおられない。…」と。墓はからでした。主はよみがえられたのです。

４月２２日　　今日の通読箇所　マルコによる福音書　１６章９～２０
「イエスはよみがえって」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU161.mp3
「週の初めの日の朝早く、イエスはよみがえって」最初にマグダラのマリヤに御自身をあらわされました。また、ふたりの弟子たちに御自身をあらわされました。その後、十一弟子が食卓についているところに現れられました。主は、彼らの不信仰と心のかたくななことをお責めになりました。「彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言うことを信じなかったからである」（１４節）。マグダラのマリヤは「イエスと一緒にいた人々が泣き悲しんでいる所に行って、

それを知らせた」のですが、彼らは信じなかったのです。彼らは、なお悲しみの中にいたのです。彼らは、イエス様が死からよみがえって、今生きて一緒にいてくださることがわからなかったからです。しかし、事実「イエスはよみがえって」くださり主は生きておられるのです。

４月２３日　　今日の通読箇所　イザヤ書　１章１～２０
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/23IZA01.mp3
今日からイザヤ書に入る。彼は開巻まず神に背いた人間の罪と、罪を犯したままで捧げるそらぞらしい礼拝の、神に憎まれることを指摘する。…名医はまず患者の病気を、正確に診断しなければならない。そしてこれを癒さなければならない。「仏心鬼手」といわれるくらいだ。そしてイザヤは 18 節以下で、いかなる罪も許し清め、受け入れてくださる、神の救いの約束を告げるのだ。これは長いイザヤ書のメッセージの要約で、おのずから、その序文をなすものである。

４月２４日　　今日の通読箇所　イザヤ書　２章１～２２
「愛と正義」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/23IZA02.mp3
［6～11 節］には神に背いたイスラエルの裁きが［12～22 節］には同じく周囲の国々の審判が記されている。しかし［1-4 節］は主の再臨の日に、罪を悔い改め、許されたイスラエルの回復と祝福が記されている。そこではイスラエル、及び教会が今の政府や権力や、軍隊などに替わって、神と聖書の光に従い、愛と正義と公平をもって世界を指導する。世界もこれを喜び、歓迎、服従し、その結果、世界に平和と、幸福と、喜びの日が来るのだ。［11 節］に、「高ぶるものは低くせられ、おごる人はかがめられ、主のみ高くあげられる」とあるのがその理由だが、同じ条件なら今でも、家庭、教会、社会に、平和、幸福、祝福が満たされるのだ。

４月２５日　　今日の通読箇所　イザヤ書　３章１～１７
「良い指導者」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/23IZA03.mp3
神に背いて裁かれるユダヤ人は、あらゆる物に欠乏するが、ここには彼等が有力な責任者、指導者がいなくて困惑する様が描かれている。これはパンや水の欠乏より困った事態なのだ。誰かに頼んでも指導者になりてがない。また信頼し安心して指導を任せる人材もいない。信仰のないものに神の家の指導はできない。良い感化力を持たないものも指導者にはなれない。信仰と霊的な力を失えば、もうその教会には人材はいなくなるのだ。我々は良い責任者、リーダーに恵まれている。しかし安心ばかりしていないで、力ある良いリーダーがさらに続出するように祈り、また心がけねばならないと思う。

４月２６日　　今日の通読箇所　イザヤ書　４章２～６
「救いの日」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/23IZA04.mp3
イザヤの心は、神に示されてイスラエルの罪と滅亡を預言する時沈鬱（ちんうつ）となり、反対に神の憐憫（れんびん）と救いを語る時には昂揚する。ここに「その日」というのは、主の救いの現れるときだ。「主の枝」はキリストのことだ。その日には主のみ名に栄光を帰せられる。イスラエルの救われた者に、誇り、光栄となるほどの豊かな産物が与えられる。キリストによって罪が許され汚れが清められるからだ。そして昔のようにイスエルは神の臨在の象徴である「雲の柱火の柱」に覆われ、これは祝福のテントのように、暑さからも雨からも、彼等を守るのだ。

４月２７日　　今日の通読箇所　イザヤ書　５章１～７
「葡萄畑の歌」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/23IZA051.mp3
ここに「愛するもの」と歌われているのは神様である。イザヤは神の示しによって、また神様のみ心を察して、この歌を歌う。ここではイスラエル、人類全体は葡萄畑にたとえられている。イザヤは神と共に、彼等が神の祝福とご期待に反して、堕落してしまったことを嘆くのだ。今誰ひとり、この世を美しい花が咲き乱れ、甘美な果実の実るすばらしい天国と、感じるものはいない。不潔と混乱と闘争の恐ろしい社会だと思っている。しかしそれは神のご責任ではない。人間が神に背き、堕落し、神の祝福を失った結果なのだ。しかも神はその人間を哀れみ、イエス・キリストによる救いを、設けてくださったのだ。

４月２８日　　今日の通読箇所　イザヤ書　５章８～１７
「貧富の差」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/23IZA052.mp3
キリストは山上の説教の序論で、「幸いなるかな」の言葉で、祝福の条件を七つ挙げた。ところがイザヤの 4、5 章には「わざわいなるかな」という神の呪いの言葉が七回出てくる。六回までは 5 章に、当時のイスラエルに対する裁きの言葉としてあらわれ、また 6 章には、預言者イザヤが神に示された自分の罪を嘆く言葉として出てくるが、これも意味深いことだと思う。イスラエルの罪とは何か。権力者が限りもなく財を増やし、贅沢と歓楽に明け暮れ、貧しいものが困苦のうちに放置される状態はその一つだ。これは資本主義社会の罪悪として指摘されるところだが、いまや、共産主義社会の同病もまた明白だ。

４月２９日　　今日の通読箇所　イザヤ書　５章１８～３０

「罪の社会」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/23IZA053.mp3
［19 節］には神とその裁きに対する大胆な侮蔑の言葉がある。［20 節］はいわゆる詭弁だ。［21 節］には独特の自信、ふてぶてしさが言われている。［22 節］は快楽に明け暮れする様子が、［23 節］には賄賂の横行が書かれている。これがイザヤ時代のイスラエル社会の、実態だったのだ。しかしこれをこのまま現在の日本に置き換えても通用するようだ。人間の罪の姿は、昔も今も変わらないと見える。しかしイザヤは続いて［24 節］以下に、イスラエルに対する神の裁きを語らなければならない。東方の強大国アッシリヤはすでにイスラエルに対して食指を動かし、虎視眈々と狙っている。彼等の凶暴な軍隊が襲いかかって来るだろう。

４月３０日　　今日の通読箇所　イザヤ書　６章１～１３
「聖なる臨在」
https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/23IZA06.mp3
イザヤは神殿の礼拝において常ならぬあざやかな主の臨在に触れた。すばらしい経験だったが、かえって、ここでイザヤは深刻に自分の罪を自覚する。今までイスラエルについて「わざわいなるかな」と警告したのに、実は自分も彼等の仲間で、程度の差こそあれ「わざわいなる」存在であるにかわりがないことを告白するに至った。ここで主の取扱いを受けたイザヤは、いよいよ本格的な預言者として立ち上がることになった。しかし彼が預言すると、かえって人々の心が堅くなるような、苦しい辛い奉仕も、覚悟しなければならなかった。